

# 松村通信第166号

11月18日

松村勝弘

## 価値観の喪失、そして漂流

**近況** 10月18日は校友大会が宝ヶ池のプリンスホテルで開かれたが、懇親会がないので、遠い宝ヶ池に行くのを無精して、二次会から参加しました。実はその前に〇次会として、ゼミ卒業生のI君と会って一献しました。引き続き一次会、二次会に参加し、多くの校友と交流しました。懇親会でこそ交流もはかどると思います。校友会は結局私にとっては懇親の場として意味があるわけですね。10月25日は立命館大学証券研究会OB会懇親会、翌26日は「日本酒の会」と連チャンでした。今回は今井さんの都々逸を楽しみました。下記がその時の写真です。



この間、阪神のクライマックスシリーズ、日本シリーズと私の好きな阪神戦が目白押しでした。惜しくも日本一は逃しましたが。

10月28日には元経済学部の小野進先生宅を訪問しました。いろいろと話し合いました。5時間くらい話し合ったと思います。今回はその時の話を交えて書きたいと思います。要は、日本における思想の「貧困」について語り合いました。それと関連して、京都市図書

館から借り入れた、佐伯啓思『自由と民主主義をもうやめる』（幻冬舎新書、2008年）も交えて書こうと思います。

## アメリカに従うことは本当に日本の国益か

佐伯啓思は現在の日本に危機感をもって論じている。日本の保守政権は、アメリカ発の構造改革路線を「嬉々として」受け入れた。アメリカの要請に従って、日本社会の根本的な変革にも着手した。だがそれで日本の現状は改善できたのか。失われた三〇年が結果したのではなかったか。佐伯は言う。

『構造改革』が始まって十年以上がたち、小泉改革からも数年がたちました。そして今日、派遣、フリーター問題、所得格差拡大、都市と地方の大きな格差、シャッター商店街、金融市場の不安定化、といった問題に日本は直面しています。これらは明らかに構造改革によってもたらされたもので、構造改革が、日本社会に大きなひずみを与えたことは否定できません。そしてその構造改革の深刻な『負の遺産』を残して、小泉さんも政界から去ってしまいました。

ことここに至っても、アメリカにつき従うのが日本にとってよいことだと本当に言えるのでしょうか。」(21-22頁) アメリカと日本では国情が違う。にもかかわらずアメリカ型を導入した。国情が違うから、形だけ導入した。価値観なき導入であった。だから「失われた30年」となって、この間の日本は漂流を続けている。

**社会の土台を変革しようとする誤り** 構造改革だ、日米構造協議だと大騒ぎしたのは



1990 年代だった。そしていろんな「改革」をした。それでうまくいったのか。佐伯はいう。

「アメリカが言うような徹底的な進歩主義的改革によって、日本社会がうまくいくとは、とても思えませんでした。

社会の『土台』がアメリカとは違うのです。

経済や政治制度はあくまで社会の『土台』の上に乗っており、この『土台』は歴史的条件やその国の文化や、さらには人々の価値観と切り離せません。」(55 頁)

要は、米国発構造改革は日本人の価値観にフィットしていなかった。うまく行くはずがなかった。否、むしろ日本社会は劣化してしまったのではないか。日本人の価値観をもう一度見直さなければならぬ。ところが、第二次大戦後、日本はアメリカ型の価値観を受け入れさせられたのではなかったか。それでも経済・社会はそれを改善して日本流に受け入れた。制度的には受け入れた。自由だ民主主義だと腫れ物に触るが如く、それを信奉したのではなかったか。佐伯はいう。

「民主主義そのものが大事なのではなく、民主政治で国民の意思を吸い上げることによって、国民の中にある文化や価値の重要なものが政治の場に表現されることが大事なのです。

したがって、日本人がいかなる文化を重んじ、いかなる価値観を持つかがある程度了解され、ハッキリしてこなければ、自由も民主主義もうまく機能しません。」(72-73 頁)「自由や民主主義、市場競争によって、何が実現したいのか、どんな社会を作りたいのか。そのヴィジョンも、プランも、想像力もなくなってしまったところにこそ問題があるのです。」(73 頁)

さらに佐伯はいう。

「どうしてこんなことになるかと言えば、国民の中で、自分たちの守るべき文化、自分たちが大事にすべき価値観が見失われてしまったからです。そもそも構造改革を断行して市場競争を徹底して、それでどういう社会にしたかったのか、というヴィジョンが何もなかったということです。

これを立て直すのは非常に難しい。絶望的と言ってもいいでしょう。」(75 頁)日本人の価値観にフィットしたどのような社会を構築したいのか。あるいは、日本人お得意の「改善」でもいい。どんな社会が望ましいのか。

**日本の価値観を対置する** ヨーロッパでも社会が発展し豊かになってから問題がでてきた。佐伯はいう。「富を実現し、人々の欲望を解放することが、社会の規律を衰弱させる。秩序を維持しようという人間の意志を麻痺させてゆく。市民社会の道徳や正義に確かな根拠を与えられなくなる。人々から本当の意味での使命感、いきいきとした生の意識を奪っていく。

すなわちニヒリズムの問題への回帰です。『全体主義と自由・民主主義の戦い』という了解によって隠されていた二十世紀の基本的な課題が、再びわれわれの前に現れた」(94-95 頁)。ニヒリズム、すなわち価値の崩壊だ。佐伯はこれに日本的価値観を対峙させる。

すなわち「ヨーロッパはニヒリズムに陥ってしまった。ニヒリズムとはすべてのものが無意味と化す状態です。言い換えれば、これまで正しいと思われてきた物事の『根拠』がなくなって『無根拠』になってしまう。」(113 頁)「ヨーロッパの場合、学問にせよ、建築にせよ、まさに石で造られた寺院のように、上に伸びるように構築していくだけに、この『無根拠性』は非常に大きな打撃です。ニヒリズムはこうしてすべてを壊していったのです。

これに対して西田幾多郎が言ったのは、東洋では無意味であることが最初から前提になっているということです。言ってみれば『無根拠』ではなく、『無』が『根拠』となりうる。

東洋には『無』という考え方があり、最初から世の中は無意味であることを知っている。しかも、その『無』は、すべてのものを受け止めている。……だからニヒリズムに陥ることもなく、『無根拠』によってまったく動じることもないわけです。

さらに言えば、逆に無の中からこそ、いろいろな『意味』が生まれてくる。『色即是空』

に対して『空即是色』となるのであって、確かにこの両者は同じことなの<sup>やわ</sup>です。」(114-115頁) 本来日本社会はそんなに柔いものではない。何をそんなに慌てて「(構造)改革」しようというのか。

**日本的価値観とは何だろう** 佐伯は日本の価値観を探究しようとする。佐伯はいう。「日本は、アメリカとも、ロシアとも、もちろん中国とも違う、なにか別の価値観を打ち出す必要があります。またその価値観は、世界に発信できると同時に、われわれ日本人自身が納得できるものでなければならない。

しかし、それが何なのか、というによくわかりません。」(144-145頁)

日本的価値観を探究して行って行きつくところは、神仏儒に行きつく。佐伯はアメリカ型の個人主義的な能力主義はどうも落ち着かない。そこで言う。

「いったい日本人の労働観の根本にあるものは何だったのでしょうか。

そこにはやはり、仏教や儒教、さらには神道的なものを核にする、日本的な宗教観が深く関わっているように思われます。」(151頁)

佐伯は、山本七平を引き合いに出して、日本の精神の中には、世俗的な労働をそのまま肯定する、プロテスタンティズムの倫理に通じるものがある(152頁)という。また、江戸時代の石田梅岩を引き合いに出していう。

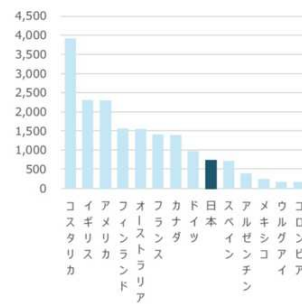
「一人一人が与えられた職分をまっとうすることで、社会の良き秩序が保たれると教えられます。……一人一人が、邪心や虚栄心や貪欲な心を排して、それぞれに道を極める。そのとき、働くことは、単なる金儲けの手段ではなく、武士道、商人道といった『道』になります。『道』とは極めて日本的な観念です。道に従うとは、言い換えれば『仁義礼智』を尽くすこと、『天命』に至ることです。

このような労働観の根底には、ピューリタンの場合と同じように、仏教、神道、儒教が融合した日本的宗教観が存在すると言ってよいでしょう。」(154頁) 天に至るということは、日本人一人一人が天に恥じない行いをする。それによって成り立っているのが日本社会です。元来日本人は自分に厳しいのです。

バブルでそれが緩んでいたことは確かです。それでバブル崩壊後、アメリカに言われて大慌てでアメリカ型を導入した。

**価値観を踏まえた提言を** 佐伯啓思も日本の価値観を踏まえるべしといい、それを探究しているわけだ。ではそれは具体的には何なのか。そこまでは踏み込んでいない。本稿ではあえてわたしなりに補って書いた。

冒頭、小野進先生と話し合ったと述べた。それを踏まえて考えてみたい。今、日本文化を踏まえた具体的な提言がほしい。野党もそれができていない。表面的なことにこだわって、しっかりした価値観を踏まえた提言ができていない。日本の政権は文教政策がなっていない。文化に理解がない。予算削減ばかりである。下図は国民1人当たり文化GDPの



国民1人あたり文化GDP(USドル)  
(出所) 文化庁「令和元年度文化芸術の経済的・社会的影響の数値評価に向けた調査研究」を元に一般社団法人芸術と創造作成

国際比較である<sup>1)</sup>。

日本の「貧しさ」がわかる。

予算(とりわけ人文社会系の予算)を削減するから、国立大学では給与も研究費も引き下げられている。だから国立大学の教授

が逃げ出している。「イギリスの教育誌による最新の『世界大学ランキング』では、1位から10位までがアメリカとイギリスの大学だけで占められた。トップ100を見ると、中国の大学がいくつも登場する。一方、日本の大学は2校のみだ。」<sup>3)</sup> 世界大学ランキングが低下する中では日本からしっかりした考え方は出てこない。政治家もしっかりした考え方をもっていないから、欧米にハッキリした価値観を持って交渉することもできない。日本の政治家には哲学がない。価値観がない。だから迫力がない。欧米の政治家をタジタジとさせるような迫力がない。

残念ながら佐伯も日本の精神を称揚しているが、これを世界に発信はできていない。石田梅岩によれば「一人一人が与えられた職分をまっとうすることで、社会の良き秩序が保たれると教えられます。……

一人一人が、邪心や虚栄心や貪欲な心を排して、それぞれに道を極める。そのとき、働くことは、単なる金儲けの手段ではなく、武士道、商人道といった『道』になります。『道』とは極めて日本的な観念です。道に従うとは、言い換えれば『仁義礼智』を尽くすこと、『天命』に至ることです。

このような労働観の根底には、ピューリタンの場合と同じように、仏教、神道、儒教が融合した日本的宗教観が存在すると言ってよいでしょう。」(154 頁)

佐伯は言う。「もっとも、このような考え方を外国人に訴えていくのは、たいへん難しい。ここに、『日本の精神』というものの困難があります。今言ったような、無私や、道を極める、『性』を知る、といった観念は、われわれ日本人は何となくわかるのですが、これを外国人に説明するのは至難の業でしょう。」(156 頁)

佐伯はこう言うだけです。研究者ですら至難の事柄を政治家が外国人に言うことができるはずがない。外国人と渡りあえるはずがない。それを深める研究をすべきだし、そのために必要な予算はたっぷり取るべきである。

**文化的景観** 私事で恐縮だが、わが家の近くにある妙心寺を散歩していて、写真を撮ろうとしても、電線や電柱が映り込んでしまうのであきらめることがある。文化的景観という言葉があるが、どこが文化的景観だと言いたくなる。電線が地中化されていない。地上に電柱を立てて電線をめぐらすのは、暫定的なはずである。欧米では、そしてアジアでも、それはみられない。日本はいつまで急場しのぎの電線を張り巡らせるつもりなのか。電柱が交通事故にも繋がっているという指摘もある。ところが、電柱が地上にあるということがあまり問題だとも思われていない。「国土交通省の調査によると、ロンドンやパリ、ベルリン、香港、台北、シンガポールなどの都市では無電柱化がほぼ完了、ソウル、ジャカルタでも高くなっているのに対して、日本の無電柱化率は幹線道路（国道・都道府県道）に限っても全国平均は 15%と大きく立ち遅れている」<sup>4)</sup> という。先進国を自負するのなら、

電線の地中化・無電柱化は必須である。電線を地中化・無電柱化すれば、宅地の価値も上がる。それを各戸が負担してでも進めるべきである。下図<sup>5)</sup>から見ても、日本がいかに立ち遅れているかがわかる。

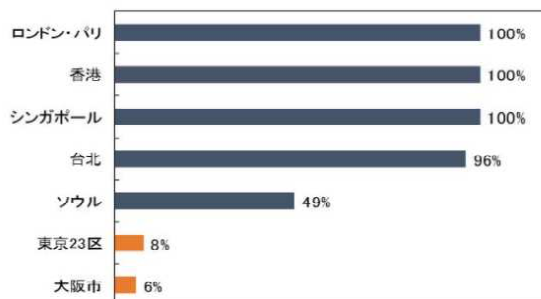


図1: 欧米やアジアの主要都市と日本の無電柱化の現状

出典: 国土交通省「無電柱化の整備状況(国内、海外)」

[https://www.mlit.go.jp/road/traffic/chicryuka/ch1\\_13\\_01.html](https://www.mlit.go.jp/road/traffic/chicryuka/ch1_13_01.html)

日本の政治はこんなことも出来ない。政治力がなさ過ぎる。そんなことも話し合いました。

ー

1) 「なぜ文化経済政策が必要なのか」『METI Journal online』2022/04/08 より。

2) 「2015 年 6 月 8 日には、文部科学省から国立大学に向けて……通達が発表され、人文社会系（いわゆる文系）学部は、『社会的要請』の多寡に応じて、組織の廃止や縮小や転換がなされるべきだとする通達が出された。……新自由主義の価値基準では、文学や歴史学、哲学や社会科学などの文系分野への過小評価」（千葉真『資本主義・デモクラシー・エコロジー』筑摩書房、2022 年、75-76 頁）が見られる。

3) 野口悠紀雄「失われた 30 年」の構造的問題は《東大 26 位》に凝縮されている！ 世界大学ランキングが示す日本が「デジタル敗戦」から抜け出せない根本原因「東洋経済 online、2025 年 10 月 30 日、<https://toyokeizai.net/articles/-/912951?display=b>。

4) ウィキペディアによる。また石田 真二「無電柱化（電線類地中化）とは？メリット・デメリットを解説！」

（<https://www.hus.ac.jp/hokukadai-jiten/detail/d59768194885d0d488cd7d7dace584ed10d857fd-18245/>）。

5) HATCH 編集部「日本ではなぜ無電柱化が進まない？電柱の整備状況と地中化に向けた国内外の取り組み」『HATCH』2022.03.17、<https://shizen-hatch.net/2022/03/17/telephone-pole/>。

HP, FBを見て下さい。又何でも意見を。

皆様のご意見を歓迎します。HP (<http://www.ritsumei.ac.jp/~matumura/>) もご覧下さい。フェイスブックもやってます。また、メールで意見交換しましょう。メールをよこして下さい ([matumura@mba.ritsumei.ac.jp](mailto:matumura@mba.ritsumei.ac.jp))。